

レポート①

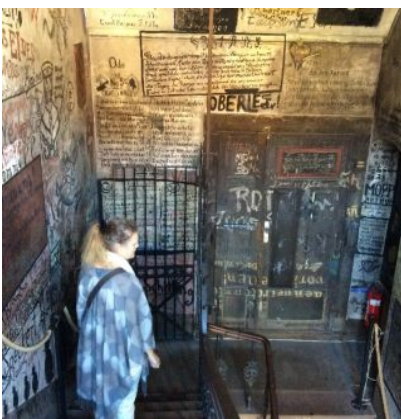
ハイデルベルク大学 学生牢の落書きーこれが、書かずにいられるかー



天井の落書き。ろうそくの煤で。



部屋のいたる所に落書き。



階段スペースにも落書き。

ハイデルベルグのメイン通りを歩いていて、吸い寄せられるように路地に入りました。出口には、ドイツ最古の大学であるハイデルベルグ大学。その格の高さを証明するようなすばらしい施設に、思わず息が止まりました。

ハイデルベルグ大学は、600年以上の歴史を持ち、多くのノーベル賞受賞者を輩出している力のある大学です。

しかし、学生の様子は、きわめて自由闊達。機敏で、芸術的な柔らかささえ感じさせました。

学風である学生自治の精神の証が、今でも、キャンパスの隅にありました。学生牢です。

ハイデルベルグ大学では、軽犯罪を犯した学生を大学が管理する牢に投獄していた歴史を持っています。

この学生牢には、入牢した学生が描いた落書きがいたる所にありました。

夜中に通りで大声で歌い近所の人に迷惑をかけたか、酔っ払って公衆の秩序を乱したり、学生同士が決闘したり、あるいは警官をからかったり侮辱したりした時に、学生牢に閉じ込められたそうです。

投獄期間は、24時間から4週間。外部には出られませんが、拘留者同士の行き来もでき、食べ物もビールまでもが注文できるそうです。うらやましいような軟禁状態です。

19世紀から第一次大戦の勃発で閉鎖されるまで、学生牢に拘留されることは、学生にとって、楽しみとなっていたとか、学生時代に一度も拘留されないことは恥ずべきことだという風潮まで生まれたとか。

なるほど、学生たちが「グランドホテル」というニックネームで呼んでいたのも、頷けます。私も、入ってみたいもの！

どこもかしこも落書きで埋め尽くされています。仲間の横顔、学生組合の紋章やモノグラム、拘留の日付け、ユーモアあふれる言葉の数々。黒のインクがなくなったのか、ろうそくの煤やストーブの煤でも、書いています。色つきは後年になってからのものとか。

それにしても、迷いのない落書きです。密度の濃い、熱のこもった書きぶりに、さすがさしさを感しました。

ここは、何度も訪れたい場所です。「熱情」を忘れた自分を、気づかせてくれます。